



遊び女に誘はれさうな捨水室
終戦日ハモニカを吹き夜に入りぬ
夜も光る廃車のミラー敗戦日
月光を満たせば重し蟬の殻
三伏や炎のやうに波頭
テーラーの人台に針原爆忌
松いっもしづかな木なり蟬羽せみのは月づき
山羊の名のしなのゆきひめ大青嶺
炎天や崩るる時を待つ巖
草引きの鈴振るやうに土ふるふ
雪溪の扶れくる芯仏めく
黴の香や離れ二階の族まふし達
口の中鉄の臭ひす原爆忌
鯨汁顔が揃ふといふ至福
*
脱ぎ捨てて水着にはかに古びたる

国見敏子
古畑恒雄
田中純子
岩井かりん
海野恵子
大野今朝子
滝澤あや
吉川教子
窪田英治
佐藤きく
福田紫枝子
細川はじめ
那須尚子
米山節子
上村敦子

甕棺に入る容して草を取る
阿久悠忌大夕焼の電波塔
日盛りを天守三階秘密部屋
漁師小屋戸口に並ぶ祭足袋
七夕の竹を柳に蝦夷の夕
自らの色絞り切り桔梗果つ
ゴキブリを食うべて戦下過ごしけり
帽子よりことさら白き跣かな
人当りよくて藪蚊の的となり
天地始めて肅す竪穴住まひ長かりき
晩夏光荒地しづめの蕎麦を播く
*

小林春代
宮岡光子
桂木節子
北野芳夫
大澤淳基
高木忠雄
佐々木恵子
住公人
柿谷有史
小原真理子
小野す美

夕暮や蟬の骸の火の色す
掌で日差遮る終戦日
糠甕を噴井に冷す地の恵み
帰省の子ご飯茶碗の小さくなり

三水芽生
山田寿子
土屋隆
丸山なおこ

岳・見えたるひかり 十月

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

(482)

はじめに。那須・黒羽吟行会が終り、殺生石、白河の関、遊行柳、雲巖寺、那珂川の下り築など、この目で「見る」ことの大切さを省みている。見つめることで自分の感じ方、とくに偏見（意外に常識的なんだが）でも独自の見方がかすかに芽生えたらもうけものなのである。柔らかな気持ちで、心にひびくものがあれば、それが見たことになる。

遊び女に誘はれさうな捨氷室 国見 敏子

もう氷の貯蔵など不要、廃物となった氷室。そんなところに遊女なんかいるものか。まあ硬く考えないで、荒れ放題の氷室の奥に藁でも敷いて開けた襦袢をたくしあげ、お好きなように。そんなイメーজはいまでも小諸や軽井沢（むかしは沓掛）の地からは容易く想像される。かつて古宿の氷室詠を残している私にはなつかしい。作者は意外に律義な自由人。

終戦日ハモニカを吹き夜に入りぬ 古畑 恒雄

昭和二十年（一九四五）頃、手にしたのは宮田ハモニカ。戦は終わった。その夜の解放感と、ハモニカのいく分粗野な音色の自在。鮮明な歴史の一コマである。

月光を満たせば重し蟬の殻 岩井かりん

白い山羊が「しなのゆきひめ」。きれいすぎ。老いて体毛も黄色に化すあわれは連想しない。まずは信濃の四囲の青嶺との対比が堂々たるもの。誌友勧誘名人の作。

炎天や崩るる時を待つ巖 窪田 英治

巖のもつ崩壊までの時間を捉えたのは手柄。

草引きの鈴振るやうに土ふるふ 佐藤 きく

これは山国の草引きではない。東北のそれでもない。京畿、王城の地の草引き。同じ草引きでも地貌が出る。それを詠う。

今月の秀句

夜も光る廃車のミラー敗戦日 田中 純子

敗戦日の七十四年前ではない。現在の敗戦日詠。三・一一ならば〈車にも仰臥という死春の月〉（高野ムツオ）があったが、掲句は廃車捨場のミラーの不気味を捉えた。国敗れた日であれば、廃車はともかく、国自体の機構の廃れようはいかと心配になろう。ミラーだけは健在。そこに殺人鬼でも映し出される。現代ほどバランスがとれない時代はない。わが廃車国家に明るい未来はあるのだろうか。意欲満々の作者。

月光は私の中の作為を誘惑するようだ。「重し」が作為的であるが、月光がそのかすようだ。作句は演出。

三伏や炎のやうに波頭 海野 恵子

真夏の波頭であるが、「炎のやうに」は鋭い。詩心あり。

テラーの人台に針原爆忌 大野今朝子

洋服仕立屋の仕上りの衣装を吊る人台。仕付け針がいつぱい。折から原爆投下の日。広島でも長崎でもその当時の現場は阿鼻叫喚の巷。今日の光景との落差は大きい。針先の痛さほどでもその日を忘れない心遣いが大切。ずっと持続する。

口の中鉄の臭ひす原爆忌 那須 尚子

歯科での治療帰りか。食物臭か。無機質的な違和感からふと原爆忌を意識した。柔らかな心の持ち主である。

松いつもしづかな木なり蟬羽月 滝澤 あや

陰暦六月を蟬羽月という。暑くなり出す月。悠然とした松。見慣れた松を「しづか」と捉えた。心境句と思う。

山羊の名のしなのゆきひめ大青嶺 吉川 教子

雪溪の扶れくる芯仏めく 福田紫枝子

巧い。雪溪の溶け扶れた骨格が仏めくとは。登山家の作者の眼に宿る仏心に共感する。じーんと感じるものあり。

黴の香や離れ二階の蔭達 細川はじめ

養蚕盛んな頃のまゝ放ってある蔭。蚕が繭籠る蔭の家。もう黴の巣になって。農村の自堕落さはどこも同じ。廃れゆく蔭。「達」に愛情がある。

鯨汁顔が揃ふといふ至福 米山 節子

塩漬けの鯨肉に葱などを投げ込む冬の料理。なにが楽しいといって、家族がわいわい笑い合いご飯を食べること、我が家の十歳になったドイツ住の子どものことばに同感した。掲句がそれ。

その他、雪嶺集・前山集推薦候補作を掲げる。

滴りの残る力を揺すりたる 西牧千恵子
まなぶたを閉ぢ逝く夏の広こりぬ 水野 星闇
火蛾狂ひ闇のふかさを知るばかり 渡辺 秀雄
川の字に眠る熱気や黴の家 小泉 千波
酢の強き干瓢巻や夏の葬 牧野きよ子

草を取る姿勢が甕棺に入る容とは

甕棺に入る容して草を取る 小林 春代

しゃがんで、同じところにいて草を取る。その姿勢が亡骸の棺桶に入るかたちとは。草深い田舎暮しをこの列島で続けてきた農夫や農婦のじくじくとした生き方。稲作が入って以来、田に草を生やさないことは身辺に草を生やさないことと連動した。草取りのその姿勢で棺に入る。かなしさを超え、三千年の歴史の真実を描いた深い一句。

阿久悠 忌大夕焼の電波塔 宮岡 光子

二〇〇七年八月一日逝去、七十歳。阿久悠の死を大都會の夕焼を背景にした電波塔で象徴した。同世代の私も阿久悠ファン。歌謡曲の作詞家として「せんせい」（森昌子）、「どうにもとまらない」（山本リンダ）数々の名曲あり。

今月の秀句

脱ぎ捨てて水着にはかに古びたる 上村 敦子

水着はいく分派手。目立つ。脱いだ途端、体につけた只の下着。極論するとこんな感じ。それほど水中と陸上との人の対し方は違う。老人の水泳もあろうが、水着をまとう大方の映像は若い。青春時代を思い浮かべる。水着はそのシンボルのようなもの。ところが、脱いだばかりに水着は古び、ご本人は一気に齡をとった感じ。現代はかつての時代よりもいっそう、衣装によってひとの気分が左右されるようだ。

日盛りを天守三階秘密部屋 桂木 節子
松本城詠とか。開けっ広げの城に秘密部屋がある。戦いに秘密のからくりは付きもの。日盛りの中、たまたま城の秘密をあばくことに行き着いたスリラー風の着想がもしろい。

漁師小屋戸口に並ぶ祭足袋 北野 芳夫

鄙びた浜の祭。大層な浜の御殿ではない。小屋がいい。その戸口に祭足袋。西鎌倉在住の作者は九十歳。庶民という今はやらないいゝ方が似合う庶民の見方、生き方が温かい。

七夕の竹を柳に蝦夷の夕 大澤 淳基

札幌在住の作者の句注によると、道内は渡島半島以北には竹が自生しない。柳が竹の代用とは、七夕祭のイメージがぐっと違う。七夕は中国伝来の宮中行事、北海道民の地貌もこゝは京畿の都の風習に従ってほしい。これが暗黙の大方の見方。私は竹の代りに柳という一事にショックを受けた。

自らの色絞り切り桔梗果つ 高木 忠雄

桔梗の美しさを讃えた一句。懸命な桔梗を描く。

ゴキブリを食うべて戦下過ごしけり 佐々木恵子

作者は四十八歳。俳句は履歴を書くものでもない。伝聞でも想像でも自由。掲句には戦時下の暮しが描かれびっくり。

帽子よりことさら白き蹴かな 住 公人

帽子と蹴との軽い対比にごく自然な意外性がある。大事にされてきた坊ちゃん。校庭なのか海岸なのか。初々しい。

人当りよくて藪蚊の的となり 柿谷 有史

さすが難波人。藪蚊にまで愛想よく好かれる。こんな明るい一句を生み出すのに有史君はどんなにご苦労されたやら。

天地始めて肅す竪穴住まひ長かりき 小原真理子

七十二候の八月末から九月一日まで。処暑をいう。縄文時代の人たちの盛夏の暮しはいかに。季語のあそびも楽しい。

晩夏光荒地しづめの蕎麦を播く 小野 す美

今月の秀句

糠甕を噴井に冷す地の恵み 土屋 隆

茄子や胡瓜を漬ける糠甕。地から噴く井戸水で冷やす。かつて作者の居住地松本の源池は、真夏でもじーんと手先が痺れるほどの清水に恵まれた。夏の暮しの原点のような作。暮しの根源をさぐる。これが現代俳句の探求の一つ。

掌で日差遮る終戦日 山田 寿子

さりげない終戦日の作。戦後世代の実感。掌で日除け。

原句へ荒地しづむる蕎麦を播く中七の添削、どうか。そこにおかしみ、俳味が生まれよう。蕎麦はそんな食物。

その他、岳集推薦候補作を掲げる。

もう一つ太陽在りや梅雨の明く 谷口とし子

夏氷解けない間を突つきをり 佐久間梨江

白緋着て晩節の志 成瀬 嘉一

梅雨明の飛行機雲に産毛かな 市原 啓子

竜舌蘭の咲くや岬に儒艮の死 渡嘉敷皓駄

たぶの木に蝶の来てゐる朝な朝な 山本 正子

塵取は臺の乗り物かもしれぬ 西村 美枝

青雲集——三句欄の配列工夫、注目作ぞくぞく

夕暮や蟬の骸の火の色す 三水 芽生

夕映を背景にしたもの。みずみずしさがある。落蟬の骸の火の色を詠い出すまでの実感の踏まえ方が素朴でいい。上手になると「夕暮」とは置かないが、まず夕焼を連想する。

帰省の子ご飯茶碗の小さくなり 丸山なおこ

大人の食に変わる。出郷してからの生活がそれとなく想像され、そこに成長を感じている。ご飯茶碗の些細な着眼が大切。自由自在な想像句も楽しい。ちまちました生活の断片を捉えた作、成功すればどれもよい。間口が広いのが俳句。

推敲・添削 ●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○臨場感ある表現

原句 青すだれ一番星のきらつきらす 松本よし乃

添削 A 青すだれ一番星のきらつきら

添削 B 青すだれ一番星のきらきらす

原句は下五音が字余りである。添削 A か B にすることで、字余りは解消する。B がいいか。A には臨場感がある。B はスタイルはいい。私は後者 B をよしとしたいが、作者は A へという気持ちをはたらいたのであろう。そこで、ここでは作者の気持ちにしたがった。いくぶん流行りの言い方であるが。

○気になる表現

類想がありすぎる表現は避ける

原句 江ノ電の家並すれすれ凌霄花

光景は鮮やかな句であるが、上五・中七はしばしば着想されている。作者は初めて言ったのだが、類想は仕方ない。

四字熟語を詠み込むと自由が効かず、句が固くなる

原句 一村の栄枯盛衰盆の海

四字熟語は意味のまとまりがあり、表現の意図は明快であるが、自由が効かない。縛られてしまう。ふつうは避けたい。

哲学的な難しい言い方は句の豊かさを削ぐ

原句 大滝に対峙してをり我は古り

「対峙」はただ向かうことを言う言葉ではない。流行のように使われるが、そこだけが難しくなるので避けた方がいい。

○このように添削し推敲する
ふさわしい位置にことばを置く

原句 天の川縄文生まれの二人かな

添削 天の川二人縄文生まれかな 夏目 重美

素朴ないい生き方をしている二人がいるのであろう。字余りにならないよう添削すると、表現に驚きが出る。

原句 体験で棺に入る八月十五日 那須 尚子

添削 棺に入る体験八月十五日

濁音の「で」を使うと句が濁るので、避けたい。

原句 夏休新潮社文庫の百冊 青山 篤司

添削 新潮の文庫百冊夏休

リズムを殺さないように。省けることばは省く。

原句 紫陽花の色鮮やかに雨に濡れ 船坂 昌文

添削 鮮やかに紫陽花雨に濡るるまま

濡れている状態が継続していることの方が平凡ではない。明快に言えることは出来るだけ明快に言う

原句 皆帰り仏間に残る梨食べる 佐藤 悦雄

添削 皆帰り盆供の梨を食べにけり

「仏間に残る」がはっきりしない。供えられた梨と明快に。

表現の仕方により面白さを出す

原句 晩夏光荒地しづむる蕎麦を播く 小野 す美

添削 晩夏光荒地しづめの蕎麦を播く

原句より「しづめの」という言い方が剽軽さが出る。